

---

# IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; ~ マイペースな転生者 ~

レティウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス<>マイペースな転生者<

### 【Nコード】

N3144BA

### 【作者名】

レティウス

### 【あらすじ】

なんともギャグみたいな理由で死んでしまった男。しかし、死んでしまったのが予定外だったみたいで、天国やまともな転生が出来ないとか……。そこで、出会った神様にチート能力を貰って、小説の世界に転生することに。その世界の名はISの世界、しかしその男は原作を知らない。ここ重要w。

そして、転生したはいいいけどやることなすことマイペースに進んでいく主人公の男の娘。再び重要w。

そんなお話

## プロローグ（前書き）

再び失敗してしまうかもただけど書いてみた！

よろしければどうぞ

## プロローグ

ふと気がつくとも目の前のそれはもう、オリンピックに出れば優勝できるぐらい気持ちがいい土下座をしている、これまた世界の女性が妬んで妬んで仕方ないくらいの絶世の美女が居た

「なにやってるの？」

とりあえず、声をかけてみる。土下座しているから悪い人じゃないよね？

「えっと、ごめんなさい！！」

行き成り謝られたんだけど、僕って謝れることって片手で数えるくらいしかないから良くわかんないんだけど

「えっと………なんで？」

「そのですね………実は部下の不始末で貴方は死んでしまったんです」

行き成り衝撃の事実だ。      そこまで驚いていない

「それで？僕は天国に行かなきゃ行けないの？」

「いえ、実はですね。現在天国に入れる人物の枠って一杯で貴方の席がないんです」

天国って人数制限あるんだ

「はい、ありますよ」

にこっと微笑む目の前の女性。だったら僕はどうなっちゃうんだろっ？

「えっとですね、本来死んだ方は天国に一時期いてもらい、手続き等がすべて終わり次第転生してもらってるんですよ」

ふ〜ん。天国ってどちらかといえば待合室？そして転生する人って病院で待っていたら先生に呼ばれたみたいなの？

「そんな感じですね。ただ、人数制限があるので、基本人間の死は基本的には此方で管理しており常に死んだ方に対しては席が用意してあるんです」

へ〜、まるで神様みたいだ

「神ですよ？」

更に驚愕の事実だ　だからあま（ry

「驚いていませんね」

驚いてるんだけどな〜……………そういえば、昔から「お前は本当にマイペースで調子が狂う」って友人によく言われたなあ

「その友人の言葉に私も激しく同意します」

友人がそれを言うたびにいつも回りが頷くけど何でだろ？

「まあ、いいでしょう。そんな訳で通常の転生が出来ないんで悪いのですがアニメなどの世界に行って貰えますか？特典などつけますし」

は、漫画みたいな展開だなあ

「大抵の人はこの事をすると喜ぶのですが貴方は違うんですね」

ゲームやアニメとかは好きだけど自分が行くとは思わなかったからあ。だから恐らく感情が追いついてないんだと思うよ？

「はあ……………まあ、いいでしょう。行って貰う世界なんですけどISって世界なのですが」

「あいえす？」

あいえす？、アイエス？、（。 。 ）ノ アイ エス？

「あら？知らないのですか？貴方の部屋に小説が置いてあったのですが？正式名称は<インフィニット・ストラトス>ですが」

ああ、ISか。買ったのはいいんだけど、別のゲームとかアニメとか見ていたら忘れていたんだ。まあ、その後の続刊とかも買っていたけどよんでないや

「あらあら、それだと別の世界のほうが……………しかし他の世界だと別の神と被ってしまうし、なにより最高神様とかツール様から与えられた私のみが管理できる世界って、普通の世界かこの世界しかないんだけど」

目の前の神様が何かぶつぶつと悩みだした。考えまとまるまで待つてあげよ

30分後

「ハッ！？スイマセン！！」

なんかまた頭を下げてきてくれたけど、僕ってそこまで偉い人じゃないよ？

「いえいえいえ！放置してしまってることが問題なんです！！」

力いっぱい叫ぶ神様だけど、別に平気だよ？

「ありがとうございます！！」

それに別に原作知らなくても別に平気でしょ？ISって確かパワードスーツ着て戦うような話だってあらずじに（帯）に書いてあったし

「当たらずとも遠からずですね。では、特典を選んでください」

特典って言ってもなあ。まあそういう世界に行くってことはあの  
パワードスーツきて戦わなきゃいけないんだよね？だったら

「えっと、スパロボって知ってる？」

「はい知ってますよ？その中の気に入った機体をISにするのです  
か？」

「ううん。そのスパロボであるステータスあるでしょ？」

「ええ」

「うん。そのステータスを全部マックスみたいな感じにして。後は  
いらないや」

「（。。）」

あ、なんか神様が2chみたいな顔になってる。なんか親近感沸  
いちゃった

「えっとでも、それだと場合によっては無駄になるかもしれませ  
んよ？」

「え、なんで？あのスーツって誰でも着れるんでしょ？」 根本的  
に勘違いしている

「はあ、まあ貴方が言うならステータスマックスで送ればいいんで  
すね？」

「うん、宜しく願います」

僕は神様に向かって頭を下げる。やってもらおうんだから頭を下げるのは当然だよな？

「では、手続きが済み次第あなたを送りますね？」

「はい、お願いします。ところで、僕が死んだ理由ってなんですか？」

「……………正月の残ったお餅をまとめて食べたならその時にノドに詰まらせての窒息死です」

うん、なんともしまらない理由だね。

## プロローグ（後書き）

やっちまった感ひしひしとw

では、次回は漸く転生後のお話です

第1話 転生しました、僕の名前は……(前書き)

独自設定が入ってくる？

## 第1話 転生しました、僕の名前は・・・

皆さんお久しぶりです。神様に転生させてもらい早6年が経過しました。

「ふん、ふん、ふん」

驚いたことによく2次小説などにある生後間もない頃に自我があるとかあるのですが、僕の場合違ったみたいで、大体3歳くらいの時に自我が目覚めました、っとメタ発言はここまでにします

「ふんふんふん」 っと、お姉ちゃん起きなきゃ

因みに今僕がしているのは家事です。6歳の僕が何故やっているかというそれは・・・両親が居ないからです。

お姉ちゃんが言うには僕達を残してどこかに消えてしまったとの事です。正直悲しいです。転生したら生みの親の顔すら分からないなんて・・・ぐすっ

「そっだ、お姉ちゃん起きないと」

ぐずってる暇はないです。速く起きないと

トン・トン・トン

とりあえず部屋をノックしてお姉ちゃんが起きてるかの確認をします。もしかしたら着替え中かもしれませんが

「返事が無い、まだ寝てるかな？入るよお姉ちゃん」

ドアノブをまわして扉を開ければベットで寝ているお姉ちゃんがいた

「全く、まだ寝てるのお姉ちゃん？ほら、起きないと朝ごはん食べられないよ？」

お姉ちゃんの肩を揺すって起そうとするけど、お姉ちゃんって起きるまでが遅いんだよね

「あ・・・と・・・5分・・・スゥ」

「ほら、そんな事しても起きれないんだから起きなきゃ」

一層揺すって起そうとしたら掛け布団がめくれるとお姉ちゃんのあられもない姿が

「もっ、またそんな格好で寝て。風邪引いちゃうよ？」

「うるさい、兎に角私は寝たいんだ！」

お姉ちゃんのちよつと大きい声にビックリしちゃった・・・グスッ

「ふえ・・・」

「！！起きたぞ！だから大丈夫だ」

「ぶぐっ」

涙が溢れそうになったら急にお姉ちゃんが飛び起きて僕を抱きしめる

「ぶはっ、おはようお姉ちゃん」ニパッ

「ああ、おはよう。一夏」

僕がお姉ちゃんの胸から離れて挨拶したらお姉ちゃんも挨拶してくれた。

あ、名前を名乗るのを忘れてました。僕の名前は織斑一夏っています。そしてお姉ちゃんこと織斑千冬です。

お姉ちゃんは凄く美人でそしてかつこいい人です。因みにお姉ちゃんは見えた目や行動は完璧だけど掃除とか家事が不得手です。完璧に見える人にも1個や2個の弱点あったほうがかわいいよね？

「お前も十分可愛いぞ、一夏」

「ありがとう、お姉ちゃん。それじゃ、着替えて顔洗ったらリビングにきてね？朝ごはんできてるから」

お姉ちゃんの部屋を出てリビングに戻ったら

「突撃！隣の晩御飯〜！おっはよう！いっくん」

「あ、束ちゃんおはよう」

朝ごはんの準備をしていたら頭にうさ耳をつけたお姉さんがやってきた

「うんうん。いっくんも元気だね！でも！さっきのにっこみは欲しかったな！」

「もにゅ？ああ、そうだね。今は朝だから朝ごはんのほづがいいのかな？」

うんうんと考えて答えを言ったら束ちゃんが凄く笑顔で頷いてくれて抱きしめられた

「あゝも〜！いっくんはかわいいなあ！！！」

あう、抱きしめてくれるのはうれしいけど胸に顔が埋まって苦しいよ。

「たばねえええ、貴様はなにをやっている？」

束ちゃんに抱きしめられていたら後ろからお姉ちゃんの声が聞こえたと思ったら拘束が緩んだからとりあえず脱出することが出来た

「あ、あはは。ちーちゃんおはよう」

「ああ、おはよう。そして・・・お休みだ」

ギリギリギリギリギリギリギリ

「みぎゃー！ちーちゃん、ちーちゃんのお愛が痛い！！！」

「ああ、一夏。朝ごはんの準備を宜しく」

そういわれたから僕は改めてキッチンに向かう。お姉ちゃんと束ちゃんは相変わらず仲がいいな。僕も篝ちゃんとこれくらい仲良くなりたいな

「でちゃう！何か出ちゃう！！」

「貴様は！唯一つの！ミスを！犯した！それは……！！！」

メキョツ

「それは……一夏に手を出したことだ！」

「ご飯できたよ？……束ちゃんそんなところで寝ていたら遅刻しちゃうよ？」

ご飯の準備が出来たから予備にきたらなんか束ちゃんが寝ていたから声をかけてみたら最初はびくびくと動いていたのが急に止まりそして

「いつくんの優しさでふっか〜っつ！！」

「ちっ」

「ん。束ちゃんの分も用意してあるから良かったら食べてね？」

そうしてテーブルについて手を合わせる

「いただきます」「」

そして、全員で挨拶をして食べ始める

「ん〜！いつくんの料理は美味しいね〜。将来いい旦那・・・」  
は嫁かな？になると思うよ！」

「一夏いつも言ってるが、こいつの分を用意する必要はなんだぞ？」

「でも、おばさんにきちんとお金貰ってるから用意してあげないとね」

こうして僕たちは料理を食べ終わり、お姉ちゃん達は学校の時間となり出かけて行った

織斑一夏、新しい人生楽しんでます

第1話 転生しました、僕の名前は・・・（後書き）

一夏がこの歳から料理してるのは可笑しい！と思われる方が大半かも知れませんが基本的には転生者なのである程度できます。

ただ大掛かりな料理はいまだタップが足りず出来なかつたり・・・

次回はファースト幼馴染の筈が登場予定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3144ba/>

---

IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; ~マイペースな転生者~

2012年1月9日03時49分発行